

反骨の教育家 評伝 長崎太郎 IV

A Critical Biography of NAGASAKI Taro (Part IV)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

日本の「ブレイクアン」

ニューヨーク時代に知り合いになったE・ワイエは、長崎太郎のブレイク版画の収集を助けたアメリカ人である。

ウイリアム・ブレイク (William Blake) は、イギリスの詩人であり、画家であり、銅版画師として知られる。長崎太郎のブレイクへの関心は、一高時代にはじまる。長崎太郎が後年日本の「ブレイクアン」とまで言われるようになるそもそものはじまりは、これまた同時代青年共通のブレイクへの関心に根ざすのであった。

武者小路実篤・志賀直哉・柳宗悦ひなもとらの雑誌『白樺』は、ブレイクを積極的に紹介した。『白樺』は毎号のように西洋美術の記事や図版を載せたが、ブレイクには特別に力を入れた。『白樺』同人と親交のあったバーナード・リーチは、イギリスの詩人であり、陶芸家

でもあるが、一九一三(大正二)年の『白樺』表紙デザインを担当し、ブレイクの詩「虎」の一節をふまえた図案を用いた。柳宗悦は一九一四(大正三)年四月号の『白樺』に、論文「キリアム・ブレイク」を発表、その図版を紹介、また、同年末には大著『キリアム・ブレイク』(洛陽堂、一九一四・一二)を刊行している。『白樺』主宰のブレイクを含む西洋美術の作品を紹介する版画や複製画による展覧会も開催された。こうした動きに刺激を受け、山本有三・山宮允くぐまこと・豊島与志雄に長崎の友、芥川龍之介や菊池寛が加わった第三次『新思潮』創刊号(一九一四・一二)の表紙は、ブレイクの「日の老いたる者」(SPACE)が、山宮允によって選ばれた。ちなみに山宮は、後年『泰西名詩選』の一冊として、『ブレイク選集』(アルス、一九二一・三)を刊行している。

長崎太郎は『白樺』のすぐ後を行く世代である。当然一高時代からその影響下にあり、ブレイクにも関心があつた。それは芥川龍之介や井川恭や成瀬正一とて同様である。芥川旧蔵複製版画に、ブレイクの「生命との別れを惜しんで身体上を浮遊する心霊」がある。画家で芥川と親交のあつた小穴隆一は、「二つの絵」(『中央公論』一九三二・一二一三三・二)で、芥川は「神田で一枚の「ウイリアム・ブレイク」の複製を発見して金三円の全財産を投じたがために歩いて帰らなければならなかつた」という一高時代のエピソードを紹介し、「そのブレイクの絵は後に彼の考案による画架にのせて死ぬまで二階の書齋の壁に掛けてあつた」と書いている。この証言は、一九一五(大正四)年九月十九日付で井川恭に送つた芥川書簡に書き込まれた詩四篇の「IV 希望」と呼応する。それは以下のような詩である。

こんどこそよい子をうまうと

牡鶏のやうに私は胸をそらせて

部屋の中をあるきまはる

今迄生んだ子のみにくさも忘れて

こんどこそよい子を生まうと

自分の未来を祝福して

私は部屋のすみに立止まる

ウイリアム・ブレイクの銅版画の前で

芥川は新たな出発をするに際して、ブレイクの『無垢と経験の歌』

(二七九四)などの力強い詩や、その独創をきわめた発想に惹かれたのであろう。他方、もともと絵が好きで、その鑑賞力も高かつた長崎太郎は、先輩や仲間からの刺激もあつて、ブレイクには早くから関心を示していた。それがニューヨークに来て、目の前に本物を見て爆発する。彼は恰好の収集対象を得て、勇躍する。書店めぐりの目標の第一は、ブレイクということになりはじめる。

E・ワイエ経営の店は、ニューヨークのレキシントン・アヴェニューにあつた。ワイエは美術品に対して鋭い眼を持つ商人で、第一次世界大戦の後で経済的に疲弊していたヨーロッパから新旧の版画や書籍などを盛んに取り寄せていたのである。ワイエの店は、当時ニューヨーク第一の美術書店として知られていた。長崎太郎はワイエの店で、まずブレイクの「カンタベリーの巡礼」(Cantabury Pilgrims)を買う。東洋人の一青年がブレイクの大きな版画を求めたものだから、不思議そうな顔をしてよいところだが、ワイエはそうした素振りは少しも見せず、静かに対応する。その後太郎が店に行くと、彼が手を出すものはばかりの貴重な本の数々を無造作に取り出しては、ことば少なに説明するようになる。

E・ワイエは痩せ型で、よく黒い服を着ていた。彼もまたユダヤ人で、額は上品にはげあがつていた。ワイエは夏になると、ヨーロッパへ仕入れに行く。ある日長崎太郎は、ワイエの留守を預かる番頭カール・シグロサーに、主人がヨーロッパからニューヨークに送ってきたばかりのブレイクの『ヨブ記挿絵集』(Illustrations of the Book of Job)を見せてもらう。それは前にミスケの店で、ロンドンの本屋のカタログに出ているのを見て電報を打ってもらつたが、売約済みとの返電でがっかりしていた時であつた。長崎はその値段を

聞いて小躍りして下宿に帰り、金策に努め、翌日月給とボーナスと貯金全部を持って店へ飛んで行き、それを買い求める。一か月後、ヨーロッパから帰ったワイエに彼の店で会ったとき、ワイエは「君はよいものを手に入れたね」と言っただけだったという。そのもの惜しみせぬ、こ気味のいいことばに太郎は打たれる。

ワイエはニューヨークの新進画家のためにも助力を惜しまなかった。長崎がアルフレッド・マウラーの風景画を一枚購入したのは、ワイエの義侠心に応える意味からであった。長崎は強い色彩、大胆な描法という率直な筆致にひかれ、九十ドルで求めたという。あとでそれを二五〇ドルで買おうという人が出たが、長崎は手放さなかった。マウラーは第二次世界大戦後、アメリカで評価されることとなる。

純真無垢な詩人画家ウィリアム・ブレイクは、長崎太郎にとって永遠のあこがれの対象であった。長崎はニューヨークのダウン・タウンの別のユダヤ人の店で、梯子を掛けて高い棚を探していてブレイクのヤングの詩に挿絵を入れた『ナイトソート』(Illustrations of *Night Thoughts*) を発見する。その時は、よろこびのあまり眼が本のまわりをぐるぐるまわって、危うく落ちそうになったという。

ミスケやワイエから耳学問で西洋版画の鑑賞の手解きを受け、ブレイクはじめ多くの版画を手にした長崎は、そのころ日本の浮世絵にもめぐり合っている。伊東深水の美人画であった。彼は明治・大正の浮世絵をこのころから集め始める。彼はそうした事情をのちに「トランクの底の浮世絵」(『京都新聞』一九五二・一〇・一三)に書くことになる。そこでは「深水の精巧、五葉の温雅、芳年の艶麗」として、三人の近代浮世絵師が評価されている。

ミスケは長崎太郎が日本に帰るため、ニューヨークを離れる時、「長崎よ、君が持ち帰る本の値打ちを誰が知ろうか」と話しかけたという。が、前述のように、現在それらの大部分は京都市立芸術大学図書館に寄贈され、整理保管されている。京都市立芸術大学附属図書館図書目録には、『長崎文庫目録』(一九九一・三)があり、その大要を知ることができる。なお、帰国後の長崎は、日本でブレイクの書画を一番多く集めている人として、一部識者に知られ、各地のブレイク展の際には、進んで出品していた。一九二八(昭和三年一月一日発行の『英語青年』第五十八巻が、前年十月の「ブレイク記念展覧会」の紹介で、そのことにふれている。

二〇〇三(平成一五)年十一月二十九、三十の両日、京都大学で開催された国際ブレイク学会には、長崎太郎収集のブレイク関係書籍と版画(現在京都市立芸術大学蔵)が展示された。その立派な目録(*Blake in the Orient*)に長崎太郎は写真入りで「Blake Collector: Taro Nagasaki」として紹介されている。要領のよい英文記事なので、あえて引用させていたたく。

We have covered the beginning of Blake's reception in Japan from the 1890s to the 1920s, but we must not forget Taro Nagasaki (1892-1969), one of the first people to bring Blake to Japan, who Bunsho Jugaku wrote about as the "Hidden Blake Collector".

An educator, Taro Nagasaki became the first postwar president of the Kyoto City University of Arts. He had met Ryunosuke Akutagawa and Makoto Sangu and came to know of

Blake when he was at the former Daichi High School. Nagasaki later worked for an ocean transport company, *Nihon Yusen*, and spent four years in New York office beginning in 1920. During this period, he began collecting Blake works and documents by searching secondhand bookstores in his free time. He acquired illustrations for Robert Blair's *The Grave*, Edward Young's *Night Thoughts*, *The Book of Job* and Chaucer's *Canterbury Pilgrims*.

He also found the first Blake biography, Alexander Gilchrist's *Life of William Blake* and a collection of Blake's poetry edited by W.B. Yeats, as well as other important early studies of Blake during this period. Among the items shown in the previously mentioned Blake exhibition planned by Masao Hataya, the particularly rare items were from Taro Nagasaki's collection. The magazine *Eigoseinen: Rising Generation* in its coverage of this Blake exhibition, wrote that Taro Nagasaki "has the biggest Blake collection in Japan."

京大で開催された国際ブレイク学会の目録に、「長崎コレクション」について」の一文を寄せた潮江宏三（京都市立芸術大学教授）は、現在京都市立芸術大学附属図書館に所蔵されているブレイク以外の文学・思想関係の旧蔵書についてもふれている。わたしも二〇〇四（平成一六）年秋、当時の学長中西進の斡旋で京都市立芸大の図書館の長崎文庫を見せてもらったが、在米中の長崎太郎の熱気がかもっている感じがした。潮江の解説を引いておこう。

長崎の西洋関係の蔵書の内訳を見て行くと、著者別の項目数ではソローの82点を筆頭に、ホーソン（78）、エマソン（54）、ポー（51）、タール（26）、ラフカディオ・ハーン（22）と続く。それらは初版本を含む著作と研究書から成っている。また同じ英語でもアメリカの文学・思想関係の書物が圧倒的に多い。もちろんそこにはホイットマンも含まれている。これに比較するとイギリス関係のものはブレイクとラスキンを除けば驚くほど少ない。このことは、もちろん長崎が日本郵船株式会社（ニューヨーク支店）に四年余り勤務したことと無関係ではない。

ここに挙げられた主要な文学者・思想家の組み合わせには、第二次世界大戦以前の日本で、精神的にもっとも開かれていて、その開かれた眼で日本文化を見つめ直しつつあった、いわゆる「大正ロマンチズム」の時代に青春を送った知的エリート特有の思想的背景が浮かび上がってくる。ロマンティックな憧憬を有し、精神的には瞑想的な孤独を好み、政治的には自由主義的矜持をもち得た知的エリーートの姿である。そこにブレイクへの特別な傾斜を加えると、「白樺派」への共感が色濃く映る。

なお、先の京都市立芸術大学附属図書館がまとめた『長崎文庫目録』とブレイク版画の収集を併せて考えると、長崎太郎がよくぞこれらの書物や版画を集めたとの感慨がしきりに湧く。その背景には、第一次世界大戦後、世界経済の中心がアメリカのニューヨークに移り、ヨーロッパから稀覯本が大量に流れ込んでいたという状況と無縁ではない。しかも、戦後の日本円の為替レートは高く、一介の会

社員に過ぎなかった長崎太郎にも、これらの書物を購入できる余力があったのである。

日本の「ブレイキアン」長崎太郎のブレイクをはじめとする書画収集の功績は、今後さらに高く評価される時代が、必ず来ることであらう。

六 ヨーロッパ視察旅行

教育への夢

日本郵船ニューヨーク支店での長崎太郎の仕事は、新規事業の開拓や顧客の獲得などである。朝早く到着荷物の確認のため、港に出かけることもあった。が、営業などはさしてやらなくても、自然に仕事は入って来るといふ船舶会社黄金時代のことである。彼は日々希望を持って仕事に当たっていた。会社が発展期だっただけにやりがいがあり、それなりの面白さもあった。とはいえ、いくら面白いといっても、生涯の仕事としては物足りない。彼は教育への夢を捨てきれなかったのである。

そうした折りに、彼は一高基督教青年会で一緒だった矢内原忠雄に会う。矢内原は一九一七（大正六）年に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業、住友総本店に入社、愛媛県新居浜市の別子鉱業所に勤務したが、一九二〇（大正九）年に辞して、創設間もない東京帝大経済学部の助教授となっていた。当時は大学に勤務した者の多くは、助教授になると在外研究をヨーロッパで行ったが、矢内原もヨーロッパでの研修を終え、アメリカ経由の帰途、ニューヨークを訪れたのである。

「長崎日記」の一九二三（大正二二）年一月二日に、「欧州より帰途にある矢内原君にあった。……矢内原君は少し肥えて見えた。学者らしい風采になった。新渡戸先生が人間は平等であると云ふ思想に到達するに至った経路の話。同先生が今もなほ何故労働者が社会をdominateせねばならぬかの問題を理解することが出来ぬと云ふ話。……」また同月九日の「長崎日記」にも矢内原忠雄が登場する。太郎は、教育の世界に入った矢内原を羨ましく思った。

彼は内村鑑三も学んだことのあるニューイングランドの名門、アマースト大学で勉強しようと思ひ、支店長の勝山勝司に相談した。勝山は長崎の一高、京大の先輩に当たり、赴任当初から長崎の面倒をなにかと見ていた。彼は「君に勝手な勉強をさせておくことも、日本のために悪いことではあるまい」と言い、大学行きをとどめ、その代わり新聞・雑誌・書籍などを自由に買わせ、読ませてくれた。それらは支店長の報告として日本の本社に送られたり、支店長のニューヨークでのスピーチの種本として生かされた。とにかく後年長崎が回想するように、ニューヨークでの日々は、古書と美術品の収集に明け暮れ、業務は第二であった。終わりのころは、仕事そっちのけで書画の収集に打ち込んだ。

彼はまた、日本の文壇で活躍しはじめた芥川龍之介や久米正雄や菊池寛の雑誌に載った小説を、この頃しきりに読み、その感想を日記に記していた。「長崎日記」から抜粋すると、「汽車に時間があつたので、中央公論に出ている芥川の「雛」といふ小説を読んだ。明治の初年に起つたことで、破壊されて行く日本の美しきものに対する当時の人々の愛着の情を書いたものであつた」（一九二三・三・二二）、「日本倶楽部に行つて、三月号の中央公論の菊池と芥川の小説

を読んで、日本食をした」(一九三三・四・二九)、「久米正雄の「病手」を読んで……」(一九三三・五・六)、「演劇画報の芥川の劇評、中央公論の菊池の所感など読む」(一九三三・七・一八)、「改造に出ていた菊池の「義民甚兵衛」と、山本の「同志の人々」を読む。菊池のは、Show's Devils Decipleから思い付いたやうな芝居である。山本有三君のは薩摩武士のことがかいてあつたが、余り感心しなかつた」といった具合である。

日本を離れて三年余、長崎太郎は転機にさしかかつていたのである。仕事に精を出しても空しさが残つた。彼はニューヨークの日本倶楽部へしばしば出かけては、『中央公論』や『新潮』や『改造』などの日本の雑誌に眼をとめ、一高時代のかつての友、芥川龍之介や菊池寛、久米正雄、山本有三らの活躍を確認するのであつた。それにしても外国で、根無し草的生活をしている自分がいとおかつた。その反動もあつて、彼は古書を買ひあさつたのである。

翌一九二四(大正一三)年四月四日、ニューヨーク日本郵船の事務所に、京大時代の同級生田村徳治が訪れた。田村は当時京大助教、ドイツで在外研究中であつた。田村は一八八六(明治一九)年七月十四日生まれなので、長崎太郎より六つも年上であつた。東京高等師範学校英語科を経ての京大法科政治学科入學で、学問に対する態度は真剣そのもので、卒業時には恒藤恭などを押さえて、政治学科の首席であり、恩賜の銀時計をもらつている。その人と学問は、『田村徳治』(編集・発行田村会、一九六〇・一二)にくわしい。

長崎太郎は、恒藤恭とも親しい数歳年上の田村を尊敬していた。それだけに田村のニューヨーク滞在中は、よくその面倒を見ている。田村は一週間ほどニューヨークにいた。そういえば当時ニューヨーク

クにいた長崎太郎の許には、さまざまな人物が訪れている。太郎は彼らを快くもてなした。彼には面倒見のよさがあつた。恩師の佐々木惣一や山本良吉も、長崎太郎がニューヨーク時代に世話をした中に数え上げられる。

四月五日は土曜日だったので、昼ごろ田村に事務所に来てもらい、鉄拳という日本料理店で接待し、セントラルパークを案内する。「長崎日記」には、「Central Parkの池の汀でベンチによつて、国家論を田村君とたたかわす。小さいCommunityから成る大きなCorporationの形に国家は變つて行くこと云ふことで一致した」とある。この日は、夕食に中華料理を御馳走し、タイムズ・スクエアに行き、「アメリカ」という映画をちよつと観て、途中で映画館を出る。翌日六日は、Bronxの動物園で昼食をしながら、恒藤恭のことや京大の話をした。

田村徳治は恒藤恭と親しかった。学問上のよき友であつたのだ。恒藤は一九二二(大正一一)年から京大の経済学部助教となつていた。そして在外研究の順番が一九二四年に訪れていたのである。長崎太郎はそのことを日本の上田操からの便りで知つていた。十日は昼食を再び鉄拳で、夕食は中華料理にして田村と親しく話し合う。共通の友、恒藤恭の話をするにつけ、彼はなつかしきでいっぱいになる。上田操からの連絡では、恒藤恭の神戸出發は三月九日であつたという。田村徳治のドイツに帰る支度を手伝いながら、長崎太郎は友のいるヨーロッパへ行くことを決意する。

パリへ

「長崎日記」を見ると、田村徳治がニューヨークに来た一九二四

年の四月に、長崎太郎は会社を辞めることを決めている。彼は日本郵船ニューヨーク支店での仕事を切り上げ、念願の教育界で働くために、帰国を考えはじめていたのである。恩師佐々木惣一が前年夏ニューヨークを訪れ、一夕食事を共にし、話が日本の教育に及んだ時にも、彼は恩師に、やがては会社を辞めて教育界に身を投じるつもりだと語っている。が、日本郵船は彼をなかなか辞めさせてくれなかった。

けれども、長崎のたつての願いを無視できず、「請暇を許す」という返電が日本の本社から来る。退職はしないで、旅にでも行つてこいという意味だ。支店長の勝山勝司のいきなはからいであつた。太郎はパリにいる恒藤恭の所へ行こうとしていた。そしてイタリアへの美術行脚を共にしたいと願つていたので。

一九二四（大正一三）年四月七日付で長崎太郎が恒藤恭に送つた便りは、ご遺族の長崎陽吉氏が保存されており、近年コピーをとらせていただいた。田村徳治のニューヨーク訪問などの話題も交え、恒藤恭に自身のヨーロッパ旅行の計画を初めて語つたものだ。以下に引用する。

この手紙を、ベルリンとロンドンとへ宛て、書きます。

三月三日付の上田操君からの便で、君の神戸出発の日は三月九日であつた事を知りました。四五日前に田村助教がフランスからこちらに來られて、色々あなたの事を承りました。

僕は今紐育におります。そして欧州旅行を企て、います。英国とドイツとイタリアが見たい、中でもイタリアに出来るだけ逗留したいと思つております。

僕の当地出發は、五月初旬の考へで準備を致しております。事によつたら会社生活を直ちに打ち切る心組であります。

若し、君と一緒にイタリアを旅行する事が出来たなら、そして文芸復興期頃の美しい絵や建築を見て歩く事が出来たならと、毎日考へてゐる次第です。

フランスにも少しでも長く留どまりたいと思ひます。君のご滞在のご予定もある事と思ひますので、何処にどの位留どまれるか、又住所の変はられる毎に、時々ご通知を頂きたいものと存じます。

昔 奈良の郊外を見て歩いた時のやうに、再び君とイタリアを歩く事が出来たなら、どんなにか嬉しい事でせう。四年目に再び君にお目にかゝつて話したい話や、承りたい事なども沢山あります。

昨日は、田村君を案内して北の方に行つた処、あいにく雨に遭つて、半日静かな田舎の公園の池のそばの小料理屋で昼飯を食べた後に、信一さん（注、恒藤恭の夭折した長男）の亡くなつた当時の話だの、八田の家の話など致しました。

僕等の生活は、四年の間に各々異なつた道の上に打ち立てられました。併し、再び君と外国でお目にかゝつて、昔のやうに一緒に歩く事は、必ずしも無意味な事でないと思はれます。

兎にも角にも会ひたく思ひます。出来るなら、前にも云つたやうに、一緒に旅行したいと思ひます。取り急いで書きました。

目下 日本に帰る準備中であります。

四月七日 紐育にて 太郎

恒藤恭様

パリの大使館で長崎太郎からの便りを手にした恒藤恭は、五月三十一日付でニューヨークの長崎太郎に返事を出す。この手紙もご遺族の長崎陽吉氏宅に保管されており、わたしは『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部、二〇〇二・五）に、その一部を引用した。友情あふれる手紙である。かなり長文の手紙なので、前著では部分紹介に留まった。ここでもそれに倣うほかない。

恒藤恭の便りには、大学の校務から解放され、自由を謳歌しているさまが伝わってくる。「巴里は僕の期待に背かず、美しくもの懐かしい都会だつた」とし、「日本を離れて、先ずこの地を居住の場所と決めた事は、本当によかつたと思つてゐる」と言う。そしてまだ、ルーヴルにも行っていないが、「君が来るなら、それ迄行かずにいよう」とも書き付けている。さらに「巴里は多くの日数を滞在するに値すると思ふ。第一こちらの人間は、人種的差別をしないのが気がいい。中世的色彩のこまやかなイタリーの建築や絵画を鑑賞する前に、この近代文明の中心の巴里に来てみる事もいゝだらう。セザンヌ・モネ・ゴーガン・シャヴァンヌ・ルノアールなどと云つたやうな人々の描いたテーマがそこに溢れてゐる。ミレーの住んだあの村も、彼の描いた田舎家や村等はそのまゝに残つてゐるさうだが、まだ行つて見ない。／＼兎に角都合がつく事ならば、先ず巴里に来たまへ」と続く。

さらに便りの中で、恒藤は「為替の関係で生活費も割合に楽なやうだ」と言い、「一旦日本に帰つたら又出直してやつて来るといふ機会は中々得難い訳だから、来るならゆつくりヨーロッパにある事をお勧めしたい。そしてこの巴里に住んで、近代文明のエッセンス

を味はう事をお勧めしたい。フランス語も習得するに十分値すると思ふ」とまで書いている。

——この懇切丁寧な友情に溢れた手紙を、長崎太郎は見ずにヨーロッパへ旅立つた。行き違いになつたのである。恒藤書簡の日付は、一九二四年五月三十一日、土曜日である。太郎を載せた船は、その日の午前十一時、出帆しているからである。太郎は当初六月二十一日の出発を考えており、恒藤恭にも知らせていた。それを急遽変更し、日を早めたのである。当日の日記に太郎は、「船は十一時に出帆。別にこれといふ特殊の感も無かつたが、愈々欧州の旅に出るかと思ふと、何となく不思議なやうな思ひがした」と書き付けている。

この日、長崎太郎はアメリカが第一次世界大戦でドイツから分捕つた、ホワイトラインの優秀船ビスマルク号に乗り、自由の女神を後にして、フランスのコタンタン半島シェルブル港へと向かつた。大西洋の波の上に出る日入る日に見入りながら、彼は幸せを感じるのであつた。今後どのような道が開けるのかはわからない。が、東縛の多い会社員生活から解放された長崎太郎の精神は、いかに充実していたことか。

一九二四（大正一三）年六月七日、長崎太郎はシェルブルでフランスの土を踏むと、恒藤恭に電話連絡し、直ちに汽車でパリに向かつた。恒藤はガール・ド・リオンを太郎を迎えた。翌日から太郎は恒藤恭とともに、ルーブルをはじめ、いくつもの美術館や博物館を見学することになる。恒藤恭の下宿は、シャン・ド・マルス公園の近く、シャルル・フロケー街三十二番地であつた。長崎太郎の目には、「Modern Apartment」に感じられた。

長崎太郎のパリの生活を世話した恒藤恭の在外研究時代のこと

は、彼の回想「学徒生活の思い出」(『同盟時報』一九五二・七〇八)や「学生生活の回顧」(『思想』一九五三・一)および、その続きの「学生生活の回顧(完)」(『思想』一九五三・二)にくわしい。また、『復活祭のころ』(朝日新聞社、一八四八・五)収録の「巴里書信」をはじめとする書簡や日記、それに山崎時彦編『若き日の恒藤恭』(世界思想社、一九七二・二)収録の「妻への便り」が参考になる。

恒藤恭のパリの第一印象は、〈美しい都〉の一言に尽きる。それは「巴里書信」(『復活祭のころ』収録)の第二、三信にくわしい。例えば次のようである。

巴里は想像にもまさつてうつくしい都だ。うつくしいといつても、決してきらびやかな、けばけばしたうつくしさではない。何しろ大ていの建物は二三百年から五六十年もたつてゐる建物なのだから、みなものさびてゐる。町の並木なんかナポレオン三世の時代にうゑたものが多いといふ。

巴里のうつくしさは近世数百年の間ヨーロッパの文化の中心となつてゐたフランスの文化が奥ゆかしく沈澱してゐるうつくしさなのだ。

それから凱旋門にのぼつた。中々高い。そして、くらい狭い石段をぐるぐる曲りながらのぼつてゆく。上からはたえず見物人がおりて来る。頂上から四方を見はらすと中々見はらしがいい。イギリスやアメリカその他いろいろの国からの男女の見物人がぞろぞろあがつて来る。

凱旋門の広場から四方八方に町がひろがつてゐるが、中でも

有名なシャン・ゼリゼー(Avenue Champs Elysees—これは大通りだけだと、Avenueといふ)が凱旋門と直角にはしつてゐる。それと交叉してゐるアヴェニュー・ド・ボア・ブローニュはことにその並木がうつくしい。どちらをむいても見わたすかぎり市街で、とほくはかすんでみえない。その中にあちらこちらにおほきい高い建物が眼にはいる。眼下を見おろすと合せて十二のとほりの一つ一つから出て来て、プラスに出ては、いろいろの方角に走せちがふ自動車のゆきかひがめまぐるしいほどだ。

恒藤恭は自分の体験したこのようなパリの第一印象を、長崎太郎にも体験して貰いたいと願ひ、各地を案内した。パリには美術館や博物館が実に多い。フランス語では、美術館・博物館ともにミューゼ(Musee)という。それが大小合わせて五十近くもあるのだ。恒藤恭は長崎太郎に、まず美術館を見て貰いたいと思つた。その代表格であるルーヴル美術館には、パリ到着翌日(六月八日)に早くも行くことになる。恒藤恭に案内されて長崎太郎は、あこがれのルーヴルに入る。

ルーヴルは、セーヌ川右岸のルーヴル宮殿内にあるフランス最大、そして世界最大の国立美術館である。一生かかつても見切れないとされるこの美術館を、長崎太郎と恒藤恭は、また来ることもできるとして、この日は駆け足で観覧した。それでも「ミロのヴィーナス」やダビンの「モナリザ」やミケランジェロの未完の「瀕死の奴隷」、ドラクロアの「民衆を導く自由の女神」などを見逃すことなく見て

翌九日は、パリの南西二十二キロのヴェルサイユ宮殿を見学する。ヴェルサイユは、太陽王と呼ばれたフランス国王ルイ14世が二十年の歳月をかけて造り上げた、雄大壮麗な宮殿である。五年前の一九一九（大正八）年六月二十八日に、第一次世界大戦の戦後処理条約が、連合国側とドイツとの間で調印された場所でもあった。そうした歴史ある宮殿を見学し、広大な庭園を歩く。宮殿の閉館後も、庭園は日没まで開いていたので、二人はゆっくりとフランス式庭園の散歩を楽しんだ。

十日は、バルビゾン村へ行く。フォンテーヌブローの森の近くの芸術村で、十九世紀の中頃に美しい森と農村風景に魅せられた多くの画家が住み着いた場所である。ミレーやテオドール・ルソーらに代表されるバルビゾン派の拠点だ。ここには美術館があり、また、ミレーの生活振りを伝える「ミレーのアトリエ」もある。これらを見学し、ルネッサン式のフォンテーヌブロー宮殿も見ている。

やがて、パリに慣れた長崎太郎は、一人で各地を見学して歩く。リュクサンブール公園やロダン美術館に行ったことが、六月十一日の「長崎日記」に記されている。六月十二日は、恒藤恭と再びルーヴル美術館へ行き、Commodo Collection を見ている。十三日は日記に「Cryny の Museum に行った」の記事がある。また、パンテオンに行き、シャヴァンヌの壁画やルソーやユーゴーやゾラの墓などを見ている。ノートルダムにも行き、「美しいガラスを通して流れ入る光を美しと眺めた」との感想を日記に記している。

この日、六月十三日、長崎太郎は恒藤恭とともに、一高時代の友、成瀬正一をパリの自宅に訪ねた。成瀬正一は一九二二（大正一〇）年四月から妻福子を伴い、パリに滞在していた。住所は18 avenue

du Colonel Bonnet Passy Paris (16) である。成瀬正一は筆まめのので、その住所を恒藤恭に知らせていたのであろう。

この時期に成瀬は、勉強の傍ら松方幸次郎の絵画収集の手伝いをしてきた。そしていわゆる松方コレクション形成に大きな役割を演じることとなる。成瀬の松方コレクションとのかかわりについては、小著『評伝成瀬正一』（日本エディタースクール出版部、一九九四・八）、および「成瀬正一の道程（Ⅱ）——松方コレクションとのかかわり」（文科大学『文学部紀要』第19―2、二〇〇六・三）を参照してほしい。

成瀬は当時フランス文学をパリで研究中だったのである。「長崎日記」の当日の記録には、「恒藤君の宅に行き、それから成瀬君を訪問。（中略）成瀬君は遊食してゐる。何となくたるんだ顔をした、疲れ切った男のやうに思はれた。菊池が芸者に関係して、子供を生んだ話を聞いた」とある。一方、成瀬正一の松岡譲宛書簡（一九二四・六・二三付）には、「先日、井川君と長崎君の訪問をうけて驚いた。二人とも変てあないが、こんなところで会はうとは思ひもよらないことであつた」とある。

日本郵船という会社勤めから解放され、長崎太郎の精神は充実していた。美術館見学のほか、恒藤恭に連れられて、各種のパーティーに出たり、踊り場を見物したりした。また、Escargot などのフランス料理を食べてみたり、一人で古い教会に入ってみたりした。

さて、パリに落ち着く間もなく、長崎太郎は恒藤恭とともに、イタリアの旅に出る。出発は「長崎日記」によると、一九二四年の六月十七日である。パリの成瀬正一宅を訪問した四日後のことだ。ヨーロッパに来て、はじめての汽車の長旅であった。太郎はこの日の日記に、「汽車は8時30分に出て、夏の日の照つてゐる緑の野を走

つた。セーヌの河か何か知らぬが処々にポプラの影を映して、ゆるやかな水が静かに流れてゐるのを見た。赤煉瓦の家、小さい村、小さいCathedralは沢山道の両側に飛んで来た。紫の美しい草花も自分の眼を慰めた」と書いている。フランスのディジョンからスイスのローザンヌを経てイタリアに入る予定であった。

ディジョンでは、ホテルの庭にマロニエの花が咲きこぼれていた。この町はパリ南東三〇キロ、コート・ドール県の県都で、ブルゴニー運河に臨む交通の要地である。ぶどう酒取引の中心地としても知られる。ディジョンは長崎太郎のいたく気に入ったところとなった。彼は日暮れまで町を歩いた。「晴れた空、爽やかな空気、中期のような建物、明るい影、町の角々の面白い建物、静かな公園、飛び交わず燕。何もかも美しかった。現代離れのしたこの小さい町を、自分はどんなに賞でたことであつたらう。酒のうまい料理屋の夕食も、その辺りのDesignも亦と無く面白かつた」と太郎は日記に書いている。絵の好きな太郎は、ディジョンでも美術館に行くが、「余り感心させられるようなものは見当たらなかつた」という。

六月十八日は、スイスのレマン湖北岸の保養地、ローザンヌで泊まる。一九二二(大正一一)年十一月から翌年にかけて、この地で国際会議(ローザンヌ会議)が開かれたことは、彼らもよく知っていた。翌日はイタリアである。「スイスに入ると山また山で、雪が高山の頂きに残つてゐて、ユングフラウ、シュワルツホルンと山の名を探しながら、美しい山を眺めながらプロンのトンネルを越えた」と日記にはある。イタリアでは、まずミラノに着く。

イタリアの旅

長崎太郎と恒藤恭のイタリアの旅に関して、わたしはすでに『恒藤恭とその時代』(日本エディタースクール出版部、二〇〇二・五)に恒藤側に視点を置いて略述した。その際も「長崎日記」は用いているが、記述が恒藤恭に力点を置くため、長崎太郎関係の情報は、大幅にカットしている。そこで重なる部分はあるにせよ、ここでは長崎太郎に視点を置いての、二人のイタリア旅行を見ていきたい。

旅はミラノからはじまった。ミラノはイタリア北部のよく知られた都市である。イタリア第一の商業・金融・工業都市で、古代ローマ以来の歴史の街でもある。街の中心は、多くのイタリアの都市がそうであるようにドゥオーモ(Duomo)だ。

ドゥオーモとは、キリスト教の大聖堂、カテドラルを指し、神の家の意味がある。ミラノの街は、ドゥオーモを中心に、ここから放射状に広がる道と、その周辺に同心円を描く道が走っている。六月二十日は、ミラノのブレラ美術館とポリディ・ペッツォーリ美術館を見学した。「長崎日記」には、「最初見たPalazzo di Breraにて、自分の好きな基督の像(ダビンチ)があつた。次に行ったMuseo Poldi-Pezzoliには、Titan's Madonnaがあつた。美しいMuseumである」とある。

アメリカ出発以来の長旅に太郎は疲れ気味で、腹をこわしていた。が、寸暇を惜しむかのように、彼らはミラノの街をあちこち歩いた。エリフォールの『世界美術史』を懐に、ルネッサンスの美術に目を見張る。イタリア美術巡礼に、彼ら二人の心は緊張していた。久しくあこがれていた国に身を置き、夢に描いた作品をはじめて目の当たりに見て、二人は重苦しい精神の疲労も感じていた。洗面づくりの聖徒の顔、血に染まった殉教者の苦悶の表情、キリストのまわり

にいる女性すら寂しく、かたくなな顔立ちに描かれている。恒藤恭の「天使のいばり」（『文藝春秋』一九二六・一二、『復活祭のころ』収録）は、こうした美術館の絵について述べた後、ブレラ美術館に入り、崖のふちで尿をしている天使の絵を見出し、ほっとしたさまを次のように描き出す。文中のN君は、言うまでもなく長崎太郎である。

「N君、ちよつと来て見たまへ。おもしろい絵があるよ」と私は室の彼方の隅に立つてゐる友人を呼んだ。そちら側の壁に懸つてゐる絵を見まはしてゐた彼は、踵をめぐらして私の傍らにやつて来た。そして私のゆびさす絵の一劃を注視しながら、「やあ、こいつは愉快だなあ」といつて、うれしさうにわらつた。

それは多くの天使たちが楽園にあそび戯れてゐるありさまをかいた絵であつた。向つて左の三分の二ばかりの画面は、のどかさうな林泉の景趣を呈し、残つた右寄りの三分の一画面には、けはしい崖の上にも、草花の咲き乱れた崖の下の平地にも、おほぜいの天使たちが遊んでゐる。崖をめざして勢ひよく空中を飛んで来る五六の天使もある。精緻な筆触で樹木の枝や葉が描かれ、空の隈や崖の岩角のくぼみがうつくしく沈んだ色彩に暗く塗られてゐた。構図の巧みさなり、色彩の程よい調和なりを示してゐるものの、取り立てて言ふべきほどの作品ではなかつたが、所狭く壁に懸けつらねてゐる沢山の絵を見て行くうちに、偶然その絵の中にゑがかれてゐる一人の天使の所作が眼にとまり、暫時その前に佇んだのであつた。

絵の右の方の上部にたはむれてゐる一と群の天使の中の或る

者たちは手をつなぎ合はせて舞踊し、或る者たちはしやがんだり、腹這つたりして、崖の下を覗きこんでゐる。その傍でひとりの天使は——それは他の仲間たちと同じやうに、むつちりと肥つた手足と、ささやかな翅の——とつがひとをもつてゐる——崖のふちに平然と立ち、崖の下をめがけて尿いばりをしてゐる。

この愛すべき天使は、すべてに解放されており、二人に安堵感を与えたと恒藤恭は言うのである。

二十日の午後は、ジェノヴァに向かつた。汽車は麦畑に桑の木が混じる平原を走り、夕方、ジェノヴァ駅に着く。ジェノヴァはリグリア州の州都で、コロンプスの出生地として知られる、イタリア最大の貿易港を持つ港町である。二人の滞在した駅前のホテルは、「頗る感心しない部屋」（『長崎日記』）であつた。翌日は、白の宮殿と呼ばれるPiazza Bianco美術館とサン・ロレンツォ教会の宝物殿を見学している。

午後はまた汽車に乗り、ピサへ向かう。海岸に沿つて走る汽車は、いくつものトンネルをくぐりピサに着く。ピサはトスカナ州に所属し、アルノ川河口から約十キロの地にある。ジェノヴァ、ヴェネツィアと並んで古くから港湾都市として栄えた町である。古い美しい教会が多い。二人は夕暮れのアルノ川の岸辺を散歩し、夕日に照らされた斜塔を眺めた。翌二十二日はピサ市内を見学する。まずドオオーモ広場へ行く。ここは市民の憩いの場であり、斜塔をはじめ主要な記念碑が集まつているピサの顔である。きれいに刈り込まれた芝生の広場は、「奇蹟の広場」と呼ばれる。斜塔があるからである。

恒藤恭と長崎太郎のイタリアの旅は、雨に絶えずつきまとわれた

が、この日も雨だった。「長崎日記」の六月二十二日には、「雨。Duomoに行く。地獄の絵を見る。雨の斜塔に上る。壁画の美しいのは、今日初めて見た訳である」と記録されている。翌日二十三日の日記も雨の記録である。「雨が降つてゐた。朝、目を覚ましてみると、アルノ河の上に雨が降りそゞいである。眠い目をして、荷物を造る。汽車が12時だから、とてもMuseumへは行けぬと云ふ。それでも12時ではなくて、15分だと分つてCivic Museumに出掛ける。Ghirlandajoの壁画や数知れぬマドンナを見る。Primitiveな絵からModernの方に移る処が何とも云はれなく面白かつた」とある。

午後は汽車に乗つて、ローマへ向かう。「汽車は海沿いに走る。松の木、小麦畑、丘、城、海上の地平線に浮ぶ雲。そんなものを眺めてローマに来た」と太郎はその日の日記に書く。ローマには一泊し、二十四日はナポリにいた。二人は、まずナポリとポンペイを訪れ、帰途にまたローマによる旅程であつた。

ナポリはイタリア南部最大の都市であり、地中海に面した風光に恵まれた町である。太陽の都の名がつくほど、陽光の降り注ぐ町といえる。二人はナポリに着くと、すぐ堀に囲まれた城塞（アンジュ一家の城）を見る。十三世紀にアンジュー家のシャルル一世の建てた城である。夜は海沿いのレストランで、イタリアの歌を聞きながら食事をした。二十五日はポンペイに行く。

ポンペイはナポリ湾に臨むカンパニア地方の都市で、西暦七十九年、ヴェスヴィオ山の大爆発によって埋没した歴史をもつ。一七五四年から本格的に発掘作業が行われ、遺品が発掘された。一九九七年には、世界文化遺産に登録されている。二人は古代都市に思いを馳せ、マリアの寺や孤児院をめぐり、ポンペイの痕跡を見て回る。

またヴェスヴィオ山の噴火口近くまで足を延ばす。

二十六日は午前中National Museumに行き、沢山の彫刻と絵を見る。そして午後列車に揺られてローマに着く。その日は前に一度入ったレストランで夕食をし、Hotel de Villeに泊まる。

ローマは言うまでもなくイタリアの首都で、古代ローマ時代から続く「永遠の都」である。彼らのイタリア旅行の最大の関心は、ローマにあつた。それゆえ滞在は、六月二十六日から七月二日までの一週間に及んだ。ローマでの二人の行程は、これまた「長崎日記」に見ることが出来る。それによると長崎太郎は、ローマに着いた頃から下痢がひどく、苦しんでいる。六月二十七日の日記に太郎は、「朝より、少し疲れを感じてゐた。Foro Romanoに行く。目もくらむように太陽に照り付けられた。石の陰に踞して地図を繰つたり、壁の陰に行つて大便をしたりした。朝から下痢して、少なからず困つた。Palatinoの丘に上がった時は目もくらみ、倒れそうであつた」とある。恒藤恭の「妻への便り」（山崎時彦編『若き日の恒藤恭』世界思想社、一九七二・一収録）の一九二四年七月二十八日付にも、「長崎君はローマで下痢をして一時は心配した。何しろイタリア料理はフランスのとはちがつて油こくしつこいので腸をいためる」とある。

フォーロ・ロマーノは、神殿やバシリカ（集会所）などの立ち並び、ローマ帝国の中心地であつたところだ。イタリアの夏は暑い。目もくらむような太陽の照る中、観光地図を手に彼らは石畳を踏みながら古代ローマを歩いた。下痢でふらふらしていた長崎は、その日の見学は、午前中でとりやめ、ホテルに戻り、絶食して床に伏すことになる。恒藤恭は一人買物に出掛けたと「長崎日記」にはある。

六月二十八日、絶食のため体が疲れていたものの、太郎は我慢して井川恭とまず巨大な建物、コロッセオ（コロッセウム）見学に行く。コロッセオは四層の大建築で、その周囲は五二七メートルもある。六万人もの観客を収容したという巨大な施設を見上げ、二人は感慨にふける。太郎は日記に「偉大な建物の中に自分自身を置いた時は、ローマの民が建てたこの建物は、矢張りアメリカ人が下町に築き上げたSkyscraperと同じ気持のもとに出来上つたものだと感ぜずにはおられなかつた」と書き付けている。次に馬車でサン・ピエトロ広場からシステイーナ礼拝堂に行き、ミケランジェロのモーセを見る。「長崎日記」には、「力強いrealisticな作である。両側に置いた婦人（リアとその姉妹）の彫刻も実に美しく、両者の対照がよいと思われた」とある。この日はさらにカピトリノ美術館とコンセルヴァトリー美術館とを駆け足で見ている。カピトリノ美術館には、「カピトリノのヴィーナス」の彫刻が置かれている。コンセルヴァトリー美術館では、さまざまな彫刻も楽しめた。「長崎日記」には「Rome期の彫刻に、頭が痛むのを覚えた。赤や黒の大理石に刻まれたセーター、チシアン、ダビンチの像など見た」とある。

翌六月二十九日、八時半ごろ二人はホテルを出て、カラカッラの浴場からカタコンベ（地下墓地）に回る。皇帝カラカッラの時代に完成した大浴場は、各種の色の大理石による外壁を持つ、一辺が三三〇メートルの巨大な建築物である。一度に一六〇〇人以上が入浴できたという。二人は馬車を走らせ、カラカッラ帝の湯の前に立つ。その後またサン・ピエトロ広場に行った。人々が参詣のため群れ歩いてきた。聖堂内では讚美歌が歌われ、法皇が祈祷のため群れ歩いてきた。午後にはパントエオンの壁画を見に行く。パントエオンはローマ帝国が認められた神々を祀った神殿である。大ドームの周囲の壁には窓はなく、中央に直径九メートルの天窓がある。そこから来る柔らかな明かりが、ドームの内に落ちる姿を長崎太郎はおもしろいと思ったと「日記」に記す。

六月三十日、二人は再びサン・ピエトロ広場へ行く。システイーナ礼拝堂に入り、天井のミケランジェロの偉大な壁画を見入る。ポッチェリーやその他の壁画を鑑賞した後、ラファエロの間に入り、Fra Angericoの壁画の部屋を経て、彫刻室へ。暑い中での強行軍の鑑賞は、いくら美術に関心があつたとはいえ、きつかつたであろう。翌七月一日も二人は、彫刻室でギリシャ・ローマの彫刻を一つ一つ見て回った。太郎は「ギリシャのものは、Rome期のものに比して遙かに調和があり、落ち着いて美しいことが段々分つて来た。二度目にSistinaに入った時は、昨日よりも明るくて一層よく天井の壁画が見られた」と日記に記している。下痢は相変わらずで、苦しい旅であつた。

美術教育家の素地

長崎太郎は、ローマでバチカン宮殿内のシステイーナ礼拝堂のミケランジェロの天井画に圧倒された。床の上に仰向けになつて、この偉大な画面に見入っている。太郎は何よりも美術が好きだつた。素人ながらその鑑識眼は高かつた。それは同行した恒藤恭にも言えたり、一高時代の友、芥川龍之介や成瀬正一や松岡譲や石田幹之助などにも同様に言えることであつた。

一高で一年先輩だつた矢代幸雄は、美術研究をライフワークとし、ちようどこのころフランスからイタリア入りし、フーレンスにい

た。彼は当時ルネッサン期の美術を研究していたのである。ちなみに矢代は、のち美術評論家として世界的評価を得る人物である。が、太郎と恒藤恭は、矢代の世話にならず、自分自身の眼で絵や彫刻を見ようとした。後年長崎太郎は、京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）学長として敏腕を振り、すぐれた人材を育てるが、その素地は、この頃から養われていたことになる。その芸術鑑賞眼は、美術館めぐりの日々の中で育てられていく。芸術教育者としての長崎太郎の力量は、学校教育ではなく、ニューヨークでの美術館・古書店・古美術商めぐり、そして友人恒藤恭とのヨーロッパ美術行脚の中で養われるのであった。このことは、特記しておかねばならぬ。

七月二日、七日間に及んだローマ滞在を切り上げ、長崎太郎と恒藤恭はフィレンツェへと向かった。フィレンツェは、糸杉とオリブの緑の丘に囲まれたトスカーナ州の州都である。町はアルノ川の両岸に展開している。いうまでもなくルネッサンス美術で知られる町である。また、ルネッサンス時代の当主であったメディチ家以来の伝統の生きた、洗練された優雅な都市としても知られる。到着した日の午後、二人は早速ウフィツィ美術館を訪ねている。アルノ川とヴェッキオ宮殿（市庁舎）にはさまれた場所にあり、ルネッサンス期の芸術品を集めた大美術館である。この日はPich Galleryのみ見て帰る。太郎の体調は依然悪く、「疲れが甚だしく、下痢も加はつた」と日記にはある。そうした体調の不調をもとせず、彼は恒藤恭とともに美術館巡りに精を出す。またとない機会を逃すまいと彼はふんばつた。

七月三日も午前中はウフィツィ美術館に行き、数々のイタリア画家の名画を見る。ポッティチェリの「ヴィーナスの誕生」「春」、レ

オナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」などである。「ポッティチェリの美しさに魅せられた」と太郎は書いている。午後はドオオーモ美術館へ行く。ここではミケランジェロの未完成の「ピエタ」やドナテッロの木彫りの「マグダラ」を見ている。それからサン・マルコ修道院とサン・ロレンツォ教会を見学する。サン・マルコ修道院にある美術館では、フラ・アンジェリコの「十字架の基督」を観て、二階に上がる。「Savonarolaの部屋などを観るうちに四時になつて締め出された」と日記にはある。サン・ロレンツォ教会ではドナテッロの手になる室内装飾を見ただけで、メディチ家のチャペルは、五時閉門のため見ることができなかった。

フィレンツェは見るところが多い。七月四日はまずサンタ・クロチエ教会を訪れる。イタリアで一番大きいフランチェスコ会の教会である。ジョットの「洗礼者ヨハネの生涯」などの壁画を見、ミケランジェロ、ガリレオ、マキャヴェリらの墓に詣でた。次に国立美術館（バルジェッロ美術館）へ行く。夏の盛りであった。ドナテロやミケランジェロの作品の前にたちすくんだ二人は、館内の熱気に参つていた。下痢に苦しんでいた長崎は、目まいを覚え、風に当たろうと建物の外側につけられた階段に出る。先に出ていた恒藤恭が写真を撮ると言うので、石段の中段に腰を下ろして、ふと建物の側面を見上げて長崎は驚く。黒ずんだ壁には長方形の不思議な彫刻をした装飾がいくつとなく取り付けられて、頭上にはイタリアの真夏の澄んだ青い空が見える。彼は思わず、「この建物には見覚えがある。僕は今ニューヨークに残してきた絵の真ん中に座っている」とつぶやく。

それはまさしく長崎太郎がニューヨーク郊外ヤンカースの古道具

屋で買い求め、下宿の部屋の正面にかけて、三年間毎日毎晩飽かずに眺めてきた絵の世界であった。彼は石段に座ったまま、急いでベデカの旅行案内を取り出して読む。それによるとこの美術館は、昔からバルジェツコの宮殿と呼ばれた建物で、かつては最高裁判所であり、その後十九世紀の半ばまでは牢獄、さらには警視總監のいたところであった。国立美術館になったのは、十九世紀の末のことであるという。何だかわからないものの、古風な南欧の建物の絵だと思つて、ニューヨークの下宿に飾り、毎日眺めて暮らしていたことと、今、克明に描かれたその絵の真ん中に自身が座っていることを、太郎は不思議に思う。彼はこの体験を、後年『防長新聞』の「日曜随想」欄（一九四九・六・二六）に書くことになる。

四日の午後は、最初にアッカデーミア美術館でミケランジェロの「ダヴィデ」像を、次にサン・マルコ美術館に急行し、四時まで再びフラ・アンジェリコを見る。アンジェリコは画僧で、天使の絵に独特の才を示した。「音楽を奏する天使たち」などがある。各部屋の壁にはアンジェリコらのフレスコ画が描かれている。二人はさらに馬車を駆って、アルノ川沿いのサンタ・マリア・デル・カルミネ教会へ行き、マザッチョのフレスコ画のアダムとイヴ（楽園追放）を大急ぎで観る。

七月五日はウフィツィ美術館を再訪、ボッティチェリ、ジョット、チマブエ、ダ・ヴィンチなど文芸復興期の人々の絵画を鑑賞する。またウフィツィ美術館と肩を並べるとされるピッティ美術館（パラティナ美術館）に行き、ラファエロとティツィアーノの作品に親しむ。

フィレンツェ最後の夜、恒藤恭は失敗の連続であった。「長崎日

記」には、「夕飯を食べた釣りを恒藤君が Guide Blue を読んでいた為早速受け取らなかつたので、ボーイが "Merci" と言つて持つて行つた。恒藤君怒る。帰りに、先生は今晩買ったばかりの Roll Film を忘れて来てしまつた」とある。フィレンツェには五泊六日滞在している。

七月六日は、朝八時過ぎの汽車でボローニャに向かつた。太郎はフィレンツェにもう一泊したかつたが、恒藤恭がボローニャ泊まりを主張したので従つたのであつた。一時過ぎにボローニャに着く。太郎は相変わらずの下痢に悩まされていた。

ボローニャの歴史は古く、その起源は、古代ローマ以前にさかのぼる。中世十一世紀以降、自治都市となつたボローニャは、ヨーロッパで最初の大学をつくつたことでも知られる。二人は若きミケランジェロの作品を尋ねて、サン・ドメニコ教会へ行く。ここにはミケランジェロの初期作品「天使」と「聖ペテローニオ」と「聖プロローコロ」の像がある。空は青く澄んでいた。二人は人のよい、眼鏡をかけた神父に案内して貰つて、ミケランジェロを観た。その後ボローニャ大学を訪ねる。

七月七日、十時五十分発のヴェネツィア（ベニス）行きの汽車に乗る。一時四十分、パトヴァに途中下車。パトヴァは古代ローマ時代からの町で、ここにはボローニャに次ぐ重要な大学が中世に生まれている。見学したスクロヴェーニ礼拝堂は、ゴシック時代の画家ジョットの壁画で飾られていた。「Giottoの色は美しい。黒のかけは使はないで、派手な色を塗りつぶしてあるが、それがよく調和している。彼の藍の色は、晴れた夏の真昼時のイタリーの空そのまゝの青である」とは、「長崎日記」に記された感想である。パトヴァ

ではカフェで時を過ごし、夕方、五時二十分の汽車に乗り、一時間ほどでヴェネツィアに着く。青銅のドームと黒のゴンドラ、立ち騒ぐ人々の姿が印象的であった。「ベニスに着いた時に見た青銅のドームと黒のゴンドラ、立ち騒ぐ人々の印象は、恐らく自分の記憶に長く残ると思う」と太郎はその日の日記に書き付ける。

水の都ヴェネツィアは、浅瀬の海の砂州の上に石を築いてつくられている。大小多くの運河が縦横にはりめぐらされ、四〇〇以上の橋でつながれる。到着した夜はゴンドラに乗って運河を下り、沖へ出る。翌日の七月八日は、午前中ヴェネツィアを代表する教会であるサン・マルコ教会を見学する。『新約聖書』の「マルコによる福音書」の著者を祀るためにつくられたこの教会は、中央に大きなアーチ、左右に二つずつ、計五つのネギ坊主のようなドームをのせたビザンティン風の建物で知られる。内部は天井や壁が聖書の物語のモザイク画で飾られている。二人はモザイクの美に目を奪われる。

次にパラッツォ・ドゥカール（統領宮殿）に行き、広い部屋部屋をめぐって、ティツィアーノ、ティントレット、ヴェロネーゼなどの壁画や絵を見る。午後はツアー客に加わって、サンタ・マリア・デイ・フラオリ教会、サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ教会、ジュジュイット教会、レゾニコ宮殿などを見た。夕食の後ゴンドラに乗って大運河を通る。九日はアッカデーミア美術館を訪れる。ここにはヴェネツィア派の画家たちの名作が並ぶ。ベッリーニ兄弟、カルパッチョ、ジョルジョーネ、テツィアーノ、それに「長崎日記」によれば、「Tintoretto Veroneseが幅を利かしていた」という。十日は夕食後、最後の「グラントキャナル行」をやる。太郎は日記に「月が少し肥えて、St.Mariaの寺の上にかゝつてゐた。悠々と

して漕ぐゴンドラに揺られて煙草をふかしながら、暮れて行く空や水に揺らぐ灯を見た時は、何とも言はれぬ旅情が胸に迫るのを感じた」と書く。一方、恒藤恭はゴンドラ体験を「妻への便り」（一九二四・七・二八付、『若き日の恒藤恭』収録）の中で、「ヴェネチアについてゴンドラにのつて美しい堀わりの中をつたつてゆくというような旅の楽しみは、イタリヤ以外の国では味わうことの出来ないものだ」と書いている。ヴェネツィアには、七月七日から十一日までの五日間滞在した。

イタリヤ旅行を終えた二人は、ドイツに行くか、スイスに行くか迷ったが、結局スイスへ行き、ユングフラウに登ることになる。七月十一日、汽車がスイスに入る頃は、すでに夕暮れに近かった。空気が変わって二人は肌に寒気を感じた。半月のかゝつた空に暮れ残る雪の山を眺めることができた。太郎は旅の無事を神に感謝した。恭は「妻への便り」（一九二四・七・二八付）に、「スイスに入ると雪にかがやくアルプスの山々、すきとおるような水をたたえた大小の湖水、ひろい牧場、崖にかかる沢山の滝、野や山の間を走る急流、そしてその間にある美しい建物、それが地方によつてそれぞれ景色がちがっている」と書きつけている。その夜はSpiesのEden Hotelに泊まり、静かな夜を過ごす。

七月十二日、太郎と恒藤恭は、ホテルから車でユングフラウへと向かった。湖水の風景が美しかった。「長崎日記」には、「湖(Thunersee)にそつて走る水の青、空の青、岸の緑、たゞ一幅の美しい絵である」とある。ユングフラウの頂上に着いた時は、ちょうど正午であった。人々が谷間でスキーをやっているのが見えた。太郎はここでも下痢に悩まされている。

パリに戻ったのは、翌日、七月十三日、日曜日の深夜である。パリを離れて約一か月間の旅であった。長崎太郎は一日置いた七月十五日、一人イギリスの旅に出て各地をめぐる。エジンバラからパリの恒藤恭に宛てた便りが残っている。中の一節に「イングラントの湖水地方では、ウインダアー・メアーといふ処に一泊し、湖畔詩人やラスキンの墓に詣でました。ワーズワースの居たといふ家の庭に立つて、東洋風の小さな庭を見た時は、嬉しく思ひました」(一九二四・七・二六付)とある。また、スペインにも出掛けた。その間の旅日記もあるはずだが、いまだ発見に至っていない。

長崎太郎が勤務地のニューヨークに戻ったのは、八月十二日のことである。五月三十一日にニューヨーク港を出て、二か月半のヨーロッパ旅行だったことになる。八月十三日付パリの恒藤恭宛書簡に長崎は、「六日こちらに居て、すぐ出発します。慌たゞしい旅であります。／我ま、を言ったのは大兄でなくて実は、小生であつたことを恥じます。／それにも拘わらず、色々の事でご寛容下さつた事を感謝致します」と書きつけている。後半の文章は、約一か月のイタリア・スイスの旅の反省である。共にわがままを言えるのは、親友ならではのことである。

一九二四(大正一三)年夏の長崎太郎のヨーロッパ視察旅行は、日本郵船の社員のまま、行われたことになる。彼は、イギリス・フランス・イタリア・スイス・スペインの五か国を訪れている。旅費は自分持ちで、休暇をとったかたちであつた。各国に赴く度に、彼は土地の美術館を精力的にのぞく。パリで買ったオペラグラスを手に、消えかかった壁画にも熱心に目を凝らした。先にも記したように、この旅は後年京都市立美術大学(現、京都市立芸術大学)学長と

して、多くの画家や陶芸家を育てた長崎太郎の芸術家としての基礎を固める旅となつたのである。

ニューヨークに戻った長崎太郎は、同年九月十二日に帰国した。四年半の海外生活であつた。彼が日本郵船株式会社を正式に退社するのは、自筆履歴書によれば、翌年の一九二五(大正一四)年三月二日のことである。